

ベッドタウンの若者の社会関係

— 中年者・高齢者との比較から —

小池 高史

1. はじめに

本稿では、現代の20代30代の若者の社会関係の実際について、埼玉県和光市で実施した質問紙調査の結果をもとに検討する。若者の社会関係が希薄化しているという言説は、1980年代以降、さまざまな論者によって現在まで繰り返し主張されてきた（杉本 2004, 福重 2006）。若者論のなかで、社会関係の問題が指摘される際には、1) 友人などの身近な人と深いつながりを持っていないこと、2) 人間関係が狭く、多様な人と付き合い合っていないことの2点が、主な論点であった（杉本 2004）。一方で、そうした若者の社会関係の変容を問題視する見方は一面的なものであり、実際の若者の社会関係の傾向は分散し多様であり、また若者自身の親密性のとらえ方も多様な要素のうえに成り立っているという反論もみられる（福重 2006）。

従来、若者の社会関係を調査データから実証しようとする試みは、現代の若者だけを対象としたものや、時系列データを用いて過去の若者と現代の若者を比較するものが主であった。本稿では、同時点における若者（20～39歳）と中年世代（40～64歳）、高齢者世代（65歳以上）の社会関係を比較することによって、これまでに語られてきた若者の社会関係の問題について検証する。

若者と中年者、高齢者を比較するなかで、とくに若者と高齢者の社会関係の類似点に着目する。一見かけ離れた存在であるように思われる若者と高齢者には、多くの類似点があることが指摘されている。アメリカの老年学者クーンとベイダーは、若者と高齢者の類似点として、表1に示した16点をあげている。

文化の違いから我が国では当てはまらないことも多い。また、クーンとベイダーが想定している若者が主に10代であると考えられるため、本稿

表1 若者と高齢者の類似点 (Kuhn & Bader 1991)

-
- 1 どちらも多くの場面でマージナルな存在であり、重要視されていない
 - 2 生活様式からも制度的にも互いに関わり合っていない
 - 3 どちらも経済的に貧しく、他者に依存的であり、助けを必要とすることが多い
 - 4 どちらも就職や仕事の継続に困難を抱えている
 - 5 どちらも精神的な安定に他者(母親と神)の存在が必要だと考えられている
 - 6 どちらもしばしば中年世代との軋轢を抱えることがある
 - 7 どちらも重大な身体上的変化を迎える
 - 8 どちらも実態にかかわらず、性がタブー視されている
 - 9 どちらも事故に合いやすい
 - 10 どちらもベッドが危険な場所である (性病と落下による怪我)
 - 11 どちらも女性の存在が社会化に基本的な影響をもつ
 - 12 どちらもある種の情報や活動、家庭内の行事から隔離されている
 - 13 どちらも運転するのにふさわしくないとされている
 - 14 どちらも年をとる
 - 15 どちらも学び生きるための豊富な時間を持っている
 - 16 どちらにも社会変革の可能性が開かれている
-

の対象とは年代が異なるが、表1にあげられた点は、いずれも社会の中心である中年世代との比較から若者と高齢者をとらえたうえで見出された類似点であるといえる。本稿も社会関係の側面において、中年世代との比較からみえる若者と高齢者の類似点と相違点を通して、現代の若者の社会関係の実際について考察する。

2. 方法

2.1 調査対象地域について

埼玉県和光市は、1970年、埼玉県で29番目の市として誕生した比較的若い市である。埼玉県の南東部にあり、西側に朝霞市、東側に荒川を挟んで戸田市と境を接する。南側は東京都と隣接し、市域は都心から15~20km圏内におさまっている。東武東上線と地下鉄の有楽町線の駅があり、都心への通勤に便利な典型的な東京のベッドタウンの性格を持つ。面

積は、約11km²で、平成24年3月31日現在の人口は76,481人を数える。人口構成の内訳は、19歳以下が18.8%、20歳から39歳が33.0%、40歳から64歳が33.1%、65歳以上が15.1%である（和光市 2013）。

2.2 調査の概要・分析対象者

調査は20歳から64歳を対象とした若・中年者調査と、65歳以上を対象とした高齢者調査にわけられる。若・中年者調査の対象者は、2012年3月31日時点の和光市民の性・年齢分布をもとに性・年齢別の抽出数を算出し、2012年10月1日時点での20～64歳の市民よりランダムに4,000人を抽出した。配布・回収ともに郵送で行った。2012年10月に実施し、1,392票の有効回答を得た（回収率34.8%）。

高齢者調査の対象者は、2012年7月1日時点で65歳以上の市民11,754人のうち、施設入所者など一部を除いた11,172人とした。配布は郵送で、回収は郵送および訪問で行った。2012年7月から8月にかけて実施し、8,300票の有効回答を得た（回収率74.3%）。

いずれの調査も、和光市役所と東京都健康長寿医療センター研究所の共同事業として、東京都健康長寿医療センター研究部門倫理委員会の承認を得て実施された。対象者には、調査の主旨や協力が任意であることと個人情報保護について、調査票郵送時に同封した書面で説明し、回答をもって同意が得られたものとした。

本稿では社会関係をテーマとし、若者と中年者、高齢者の調査結果を比較するため、健康上の障害があり、自由な社会関係が妨げられている高齢者は比較対象としてふさわしくない。そこで、高齢者調査の回答者のうち要介護・要支援認定を受けてなく¹⁾、移動能力が自立しており、老研式活動能力指標が満点である人を分析対象とした²⁾。結果、分析対象者は、若者（20～39歳）が596人、中年者（40～64歳）が796人、高齢者（65～101歳）が3,243人となった。

2.3 調査項目

調査票では、基本属性（性別、年齢、配偶者の有無、仕事の有無、居住歴、居住形態、経済状態）と社会関係に関する項目（各種グループ・団体への加入の有無、近所づきあいの有無、友人や近所の人との接触頻度、友人や近所の人との交流に対する満足度、親しい友人の有無、ソーシャルサ

ポートの有無、自分と背景の異なる人との付き合いの程度、孤立感)を尋ねた。

居住歴は、和光市での居住年数を「1年未満」「1年から3年未満」「3年から5年未満」「5年から10年未満」「10年から20年未満」「20年から30年未満」「30年以上」の7件法で尋ねた。居住形態は、一戸建ての住宅に住んでいるか、集合住宅に住んでいるかを尋ねた。経済状態は、自分の暮らし向き(主観的な経済状態)について、「非常に苦勞している」「やや苦勞している」「どちらともいえない」「ややゆとりがある」「非常にゆとりがある」の5件法で尋ねた。

加入の有無を尋ねたグループ・団体は、「町内会・自治会」「趣味の団体」「スポーツの団体」「ボランティア団体」であり、あわせて「どのようなグループ・団体にも加入していない」という選択肢を設定した。近所づきあいの有無は、挨拶をする程度を含めて近所づきあいをしているか否かを尋ねた。友人や近所の人との接触頻度は、「友人や近所の人と会う頻度(対面接触頻度)」と「友人や近所の人と電話する頻度(非対面接触頻度)」に分け、それぞれ「週に6、7回」「週に4、5回」「週に2、3回」「週に1回くらい」「月に2、3回」「月に1回くらい」「月に1回より少ない」「まったくくない」の8件法で尋ね、「週1回以上」「月1回以上」「月1回未満」にまとめた。友人や近所の人との交流に対する満足度は、「とても満足」「わりと満足」「あまり満足していない」「満足していない」の4件法で尋ねた。親しい友人の有無は、「心を打ち明けて、自分の思っていることや心配事を話することができる親しい友人」がいるかどうかを尋ねた。ソーシャルサポートは愚痴を言い合う仲に着目し、「愚痴を聞いてもらえる人」「愚痴を聞いてあげる人」のそれぞれがいるかどうかを尋ねた。自分と背景の異なる人との付き合いの程度は、「性別、世代、暮らしぶりなどの背景が自分と異なる人」との付き合いが多いかどうかを、「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらともいえない」「どちらかというと思うわない」「そう思わない」の5件法で尋ねた。孤立感は、「まわりの人から孤立していると感じること」があるかどうかを、「ほとんどない」「あまりない」「ときどきある」「よくある」の4件法で尋ねた。

2.4 分析方法

若者の社会関係の問題の論点である「友人などの身近な人と深いつなが

りを持っていないこと」および「人間関係が狭く、多様な人と付き合いがないこと」について検証するために、社会関係に関する各項目について、若者と中年者、高齢者に分けてクロス集計し、 χ^2 検定を行った。

また、「人間関係が狭く、多様な人と付き合いがないこと」については、若者の社会関係の広がりに関連する要因を検討するため、背景の異なる人との付き合いの質問に、「そう思う」「どちらかというと思う」と答えたか、それ以外と答えたかを従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数には、性別、年齢、配偶者の有無、仕事の有無、暮らし向き、和光市での居住年数、居住形態を強制投入した。解析には、IBM SPSS Statistics 21を用い、有意水準は5%とした。

3. 結果

3.1 分析対象の若者の特徴

表2に分析対象となった若者の基本属性を示した。

男性が42.1%、女性が57.9%であった。年齢は、20歳から24歳が11.9%、25歳から29歳が18.6%、30歳から34歳が31.4%、35歳から39歳が38.1%であり、30代の人が多数派であった。配偶者がいる人は59.7%であり、現在一人暮らしの人は18.0%であった。仕事を持っている人は74.1%であり、無職の人は20.5%であった。和光市での居住歴は、3年未満が35.1%、3年から10年未満が35.4%、10年以上が28.9%であり、70%以上が居住歴10年未満であった。

表2 分析対象の若者の特徴 (%)

性別	男性	42.1
	女性	57.9
年齢	20～24	11.9
	25～29	18.6
	30～34	31.4
	35～39	38.1
配偶者	いる	59.7
	離別	3.2
	未婚	37.2
	(一人暮らし)	(18.0)
仕事	有職	74.1
	学生	5.2
	無職	20.5
居住歴	3年未満	35.1
	3年～10年未満	35.4
	10年以上	28.9

3.2 年代別の社会関係の実際

社会関係に関する各項目の若者と中年者、高齢者別のクロス集計の結果は、1) 年代が上がるにつれて社会関係量が増加する項目、2) 若者と高齢

者で社会関係量が多く、中年者で少なくなる項目、3) 年代が上がるにつれて減少する孤立感に分けて示す。

3.2.1 年代が上がるにつれて社会関係量が増加する項目

年代が上がるにつれて社会関係量が増加する項目は、各種団体への加入率と近所づきあいの有無であった。表3に結果を示す。

町内会・自治会への加入率は、若者が14.8%、中年者が26.6%、高齢者が40.0%であった。趣味の団体への加入率は、若者が8.6%、中年者が13.3%、高齢者が40.5%であった。スポーツの団体への加入率は、若者が10.1%、中年者が15.5%、高齢者が27.5%であった。ボランティア団体への加入率は、若者が2.3%、中年者が3.6%、高齢者が9.8%であった。以上、すべての種類のグループ・団体に関して、加入率は年代が上がるにつれて向上するという結果だった。逆にどんな種類のグループ・団体にも加入していない人の割合は、若者が65.1%、中年者が51.0%、高齢者が17.4%であった。近所づきあいをしている人の割合も、若者が76.8%、中年者が86.1%、高齢者が96.9%と年代が上がるにつれて高くなる傾向があった。

3.2.2 若者と高齢者で社会関係量が多く、中年者で少なくなる項目

若者と高齢者で社会関係量が多く、中年者で少なくなる項目は、友人や近所の人との接触頻度、友人や近所の人との交流に対する満足度、親しい友人の有無、ソーシャルサポートの有無、自分と背景の異なる人との付き

表3 年代が上がるにつれて社会関係量が増加する項目の結果 (%)

		若者	中年者	高齢者	<i>p</i>
グループ団体への加入率	町内会・自治会	14.8	26.6	40.0	<.001
	趣味	8.6	13.3	40.5	<.001
	スポーツ	10.1	15.5	27.5	<.001
	ボランティア	2.3	3.6	9.8	<.001
	加入なし	65.1	51.0	17.4	<.001
近所づきあい(有り)		76.8	86.1	96.9	<.001

合いの程度であった。

表4に友人や近所の人との接触頻度の結果を示す。

対面接触では、週1回以上ある人が若者で22.2%、中年者で11.3%、高齢者で36.5%、月1回以上はある人が若者で37.5%、中年者で32.3%、高齢者で36.9%、月1回未満の人が若者で40.3%、中年者で56.5%、高齢者で26.6%であった。

非対面接触では、週1回以上ある人が若者で50.4%、中年者で32.7%、高齢者で57.4%、月1回以上はある人が若者で23.4%、中年者で29.3%、高齢者で29.3%、月1回未満の人が若者で26.2%、中年者で38.0%、高齢者で13.4%であった。

対面接触と非対面接触のいずれにおいても、接触頻度は高齢者、若者、中年者の順で高いという結果だった。

表5に友人や近所の人との交流に対する満足度の結果を示す。

表4 友人や近所の人との接触頻度 (%)

		若者	中年者	高齢者	<i>p</i>
対面接触	週1回以上	22.2	11.3	36.5	<.001
	月1回以上	37.5	32.3	36.9	
	月1回未満	40.3	56.5	26.6	
非対面接触	週1回以上	50.4	32.7	57.4	<.001
	月1回以上	23.4	29.3	29.3	
	月1回未満	26.2	38.0	13.4	

表5 友人や近所の人との交流に対する満足度 (%)

	若者	中年者	高齢者
とても満足	15.7	8.0	18.6
わりと満足	65.2	70.4	73.8
あまり満足していない	15.9	17.6	6.2
満足していない	3.2	4.1	1.4

※*p*<.001

「とても満足」と「わりと満足」を合わせた割合は、若者で80.9%、中年者で78.4%、高齢者で92.4%と、接触頻度と同じく友人や近所の人との交流に対する満足感においても高齢者、若者、中年者の順で高いという結果だった。

表6に親しい友人およびソーシャルサポートの有無の結果を示す。

親しい友人がいる人は、若者が86.5%、中年者が77.8%、高齢者が89.4%、愚痴を聞いてもらえる人がいる人は、若者が98.0%、中年者が94.3%、高齢者が98.3%、愚痴を聞いてあげる人がいる人は、若者が97.6%、中年者が95.1%、高齢者が97.8%と、いずれの項目においても若者と高齢者でいる人の割合が高く、中年者で低いという結果であった。

表7に自分と背景が異なる人との付き合いについての結果を示す。

「自分と背景が異なる人との付き合いが多いですか」という質問に、「そう思う」もしくは「どちらかというと思う」と答えた人の割合は、若者が23.6%、中年者が18.8%、高齢者が20.4%、反対に「そう思わない」

表6 親しい友人およびソーシャルサポートがある人の割合 (%)

	若者	中年者	高齢者	<i>p</i>
親しい友人	86.5	77.8	89.4	<.001
愚痴を聞いてもらえる人	98.0	94.3	98.3	<.001
愚痴を聞いてあげる人	97.6	95.1	97.8	<.001

表7 自分と背景の異なる人との付き合いについての結果 (%)

「自分と背景が異なる人との付き合いが多いですか」			
	若者	中年者	高齢者
そう思う	7.1	4.2	10.1
どちらかというと思う	16.5	14.6	10.3
どちらともいえない	34.9	37.7	47.7
どちらかというと思わない	24.1	17.8	14.8
そう思わない	17.4	25.7	17.1

※*p*<.001

表8 年代別の孤立感 (%)

「まわりの人から孤立していると感じることがどのくらいありますか」			
	若者	中年者	高齢者
ほとんどない	23.9	25.3	48.8
あまりない	39.0	48.7	34.5
ときどきある	29.6	21.7	5.5
よくある	7.6	4.3	0.8

※ $p < .001$

もしくは「どちらかというところ思わない」と答えた人の割合は、若者が41.5%、中年者が43.5%、高齢者が31.9%であり、社会関係の広がりについても若者と高齢者で広く、中年者で狭いという結果が示された。

3.2.3 年代別の孤立感

社会関係の主観的な側面である孤立感の年代別の結果を表8に示す。

「まわりの人から孤立していると感じることがどのくらいありますか」という質問に、「よくある」もしくは「ときどきある」と答えた人の割合は、若者が37.2%、中年者が26.0%、高齢者が6.3%であり、年代が上がるにつれて低くなる傾向がみられた。

3.3 若者の社会関係の広がりに関連する要因

背景の異なる人との付き合いの程度を従属変数とした、二項ロジスティック回帰分析の結果を表9に示す。

社会関係の広がりに関連していた要因は、配偶者の有無、暮らし向きであった。有意傾向ではあるが、居住歴との関連も示唆された。具体的には、配偶者のいる人はいない人より、暮らし向きが「どちらともいえない」および「ややゆとりがある」人は、「非常に苦労している」人より社会関係が狭い傾向にあり、居住歴が30年以上の人は、1年未満の人より広い傾向にあった。Hosmer & Lemeshowの適合度検定では、 $\chi^2 = 5.6$ ($p = .688$)であり、回帰モデルの適合性が確認された。

表9 ロジスティック回帰分析の結果 (n=582)

要因	カテゴリー	OR	95% CL	
			下限	上限
性別	女性	1.15	0.75	1.77
年齢	20-39	0.97	0.93	1.02
配偶者	あり	0.61*	0.38	0.98
仕事	あり	1.47	0.88	2.45
暮らし向き	やや苦勞している	0.48 [†]	0.22	1.06
	どちらともいえない	0.38*	0.18	0.81
	ややゆとりがある	0.33**	0.15	0.75
	非常にゆとりがある	0.84	0.29	2.43
居住歴	1-3年	0.82	0.40	1.66
	3-5年	1.20	0.57	2.56
	5-10年	0.91	0.43	1.95
	10-20年	0.65	0.29	1.48
	20-30年	1.81	0.77	4.25
	30年以上	2.47 [†]	0.95	6.40
居住形態	一戸建て	0.92	0.55	1.55
Nagelkerke R ²			.101	
Hosmer & Lemeshow の検定			$\chi^2 = 5.6$ n.s. (df = 8)	

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .1$

※参照カテゴリー：男性（性別）、配偶者なし、仕事なし、非常に苦勞している（暮らし向き）、1年未満（居住歴）、集合住宅

4. まとめと考察

これまでに語られてきた若者の社会関係の問題について検証するために、若者と中年者、高齢者の社会関係を比較した。結果、グループや団体への参加および近所づきあいについては、年代が上がるにつれて社会関係量が増加することが明らかになった。一方で、友人や近所の人との接触頻度や満足度、親しい友人の有無、愚痴を聞いてくれる／あげる人の有無、背景の異なる人との付き合いについては、若者と高齢者で多く、中年者で

少なくなる傾向があった。ここから若者の社会関係の特徴としては、上の年代とは異なり、フォーマル／インフォーマルな団体への加入や、住居の空間的に規定された近隣での付き合いについては希薄であるが、友人との付き合いは頻繁で満足度も高く、親しい友人やソーシャルサポートを有している人も多く、自分と背景の異なる人とも広く関係を持っているということが指摘できる。

若者の地域での社会関係が希薄であること（内閣府 2007）や、都市部の若者が地方の若者よりも地域での活動に参加していないこと（坂西 2010）は、これまでも指摘されてきた。中年者の社会関係は、職場や子どもに関係する場での、狭く情緒的というよりも機能的な人間関係が中心になっているのではないかと考えられる。また、本稿の結果からは、一貫して高齢者の社会関係が他の年代と比べて充実していることが明らかになった。近年、高齢者の孤立が社会問題とされているが（内閣府 2010；小池ほか 2011；斉藤ほか 2009, 2010）、健康な高齢者に限定し単純な社会関係の充実度だけでいえば、他の年代と比べて決して低いわけではない。

社会関係の主観的な側面を示す孤立感は、年代が下がるにつれて上昇することが明らかになった。上述した社会関係の実態からすると、客観的には若者がとくに孤立しているとはいえず、親しい友人がいて愚痴を言い合える相手がいるにも関わらず、主観的には孤立感を抱えている人が多いということである。土井（2012）は、一人でいる人間には価値がないとみなす見方が社会に広まっており、現代の若者が孤立への過剰な不安を煽られる状況にあると述べている。本調査の結果は、土井の指摘を年代間の比較からも裏付けることとなった。

若者の社会関係の狭さが問題視されてきた背景を踏まえ、若者の社会関係の広がりに関連する要因について検討した。結果、居住年数の長い人、配偶者がいない人、暮らし向きに余裕のない人が多様な人との付き合いを持っていることが示唆された。

本調査のフィールドはベッドタウンの特徴を持っており、子どものあるから暮らしている若者とともに、進学や就職のために地方から移り住んできた若者も多数存在する。社会関係の広がりという面では、子どものあるから暮らしており居住年数の長い若者に比べて、地方から移り住んできた若者は劣っていることが考えられる。

また、配偶者がいない人、暮らし向きに余裕のない人ほど背景の多様な

人と付き合いしているという結果は、逆からみれば配偶者がおり、暮らし向きにも余裕のある若者は、比較的固定した狭い社会関係のなかで充足して生活しているということであり、社会関係の狭さは問題視されるべきものではなく、本人の生活の安定やゆとりを示すものであるのかもしれない。

本稿の分析の範囲内では、若者の社会関係は中年者よりもむしろ高齢者と類似している面が多く、社会関係の量とともにその広がりにおいても中年者より充実していた。これもまた、問題視されることの多い現代の若者の社会関係の一面である。ただ、それにもかかわらず孤立感を持っている人が多いことがむしろ、現代の若者の社会関係の問題であり、この点については、今後継続して検討していく必要がある。

社会関係に関する先行研究では、おもに個人の性別や家族、仕事といった面との関連が取り上げられてきた。本稿では、年代ごとに集団としてとらえて比較することで、社会関係の面で若者と高齢者の類似性が浮かび上がってきた。現代の若者を論じるには、いつの誰と比べての特徴なのかに自覚的であることが必要だと考える。

付 記

調査は、平成24年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業）「地域包括ケアにおける孤立予防戦略の展開～住民による「見守りチェックシート」の開発～」(研究代表者 藤原佳典)、平成24年度一般財団法人都市のしくみとくらし研究所助成金「エイジフレンドリーシティに向けた健康アウトカムに及ぼす住居・環境要因の解明」(研究代表者 藤原佳典)、平成24年度科学研究費補助金（若手研究B）「高齢者における客観的および主観的「孤立」の実態と健康面への影響に関する研究」(研究代表者 西真理子)の助成を受けて行ったものである。

注

- 1) 要介護認定については、和光市から情報を得た。
- 2) 高齢者調査のみ、調査票のなかで移動能力と老研式活動能力指標による生活機能を尋ねた。

引用文献

土井隆義, 2012, 「孤立不安を煽られる若者たち」『青少年問題』648: 14-19.

- 福重 清, 2006, 「若者の友人関係はどうなっているのか」 浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房, 115-147.
- 小池高史・西森利樹・堀 恭子・朝比奈千絵・長谷川倫子・宮前史子・張卉林・許海栄・佐野美媛・安藤孝敏, 2011, 「民間団体による独居高齢者への支援活動の現状と課題——支援団体へのインタビューから」『技術マネジメント研究』10: 27-35.
- Kuhn, M. and Bader, J., 1991, "Old and Young are Alike in Many Ways," *The Gerontologist* 31 (2) : 273-274.
- 内閣府, 2007, 平成19年度版国民生活白書.
——, 2010, 平成22年度版高齢社会白書.
- 斉藤雅茂・冷水 豊・山口麻衣・武居幸子, 2009, 「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」『社会福祉学』50 (1) : 110-122.
- 斉藤雅茂・藤原佳典・小林江里香・深谷太郎・西真理子・新開省二, 2010, 「首都圏ベッドタウンにおける世帯構成別にみた孤立高齢者の発現率と特徴」『日本公衆衛生雑誌』57 (9) : 785-795.
- 坂西友秀, 2010, 「若者の地域社会への関わりと地域存続に果たす役割」『心理学』31 (2) : 49-67.
- 杉本裕司, 2004, 「「若者の友人関係の希薄化」という言説に関する考察」『文学部論叢 (人間科学・コミュニケーション情報学篇)』80 : 53-69.

引用ウェブサイト

- 和光市, 2013, 和光市ホームページ, (2013年7月22日取得, <http://www.city.wako.lg.jp/>).